

3学期始業式辞

寒さの厳しい中、いよいよ3学期が始まります。

まずは、大きな事故もなく、皆さんとともに新学期が迎えられることを大変うれしく思います。最近の感染に関する情報を見ると、本当に少しの油断もできないと強く感じます。皆さんも、そして我々教職員も、それぞれが感染対策を万全にして生活をしましょう。

さて、始業式にあたり、皆さんの先輩、「森田欣也さん」のご紹介をします。ほとんどの皆さんが知らないと思います。彼は、ラグビーの試合で頸椎を負傷し、車いす生活を余儀なくされました。私も彼と同じラグビー部に所属していました。

高校三年生の時、花園を目指していた彼を悲劇が襲い、人生が一変しました。意識がはっきりしているのに、体の自由がきかない現実、ベッドの上での闇の生活、「何度も舌をかみ切って死んでやろうと思った」と言っています。

事故の二年後には、いら立ちをぶつけ続けた母親が他界するという苦難も続きました。悲しみに追い打ちをかける中、葬儀の夜、父から母の日記が手渡されました。そこには、「欣也ががんばっているから、かあさんもがんばらな」と書かれています。彼は、その日記で目が覚め、その後、リハビリをはじめ、補助具を付けて文字が書けるようになり、手に包帯を巻いてペンを握り、五分以上かけて、はじめて「ありがとう」の五文字を書くことができました。それから十年、わずかに右手が動くようになり、俳句を始め、愛媛出版文化賞をはじめ、多数のコンテスト等で受賞するまで努力を続けています。

彼のような境遇に出会えば、大抵の人はあきらめてしまうと思いますが、彼は、あきらめないどころか、それ以上のことをしています。それは、母校である本校で開催された講演会から、強く感じ得ることもできました。講演会では、事故のこと、障害者にやさしい街づくりの大切さを訴え、三つの夢をユーモアを交えて紹介してくれました。一つ目は「彼女をつくること」、二つ目は「自立をして一人暮らしがしてみたいこと」、三つ目は「森田欣也という人間が確かに生きていたという証しとして、本を出版すること」そして、最後に「生きていく証が残せて本当にうれしい。小さくても夢を持ち、生きてさえいれば、支えてくれる人が現れる」と話されたことが印象に残っています。

努力し続けることの大切さ、「努力の歩みを決して止めてはならない」ということを彼から改めて教えてもらいました。いかなるときも、少しずつでも歩いていけば、目的地に到着できます。止まってしまえば、絶対に前には行けません。動いていけば前進もできます。「努力」を続けることは、決して楽ではありません。しかし、「努力」は嘘をつきません。君たちの前途には、試練の嵐も吹き荒れることもあるでしょうが、「努力」を忘れぬ、力強い精神をもって、学校生活を送ってほしいと思います。そして、今を全力で歩んでください。

本日のもう少し詳しい内容を、今学期の発刊予定「図書館報」の巻頭言に掲載する予定です。是非、一読してください。そして、このような境遇のなかでも、力強く歩み続けた先輩がいたことを本校としても忘れてはならないと思います。

それではこの3学期の皆さんのさらなるがんばりに期待をして式辞といたします。

令和5年1月10日 伊予農業高等学校長 松永 泰